

夜

食の文字 ● 石井中明朝 ニューススタイル

有名な「おんなのことば」の一節。

茨木のり子については多くの出版社から作品集が出版されているけれど、この〈石井中明朝ニューススタイル〉で組まれたものが私はいちばん好き。

戦後を代表する女性詩人の、痛烈な社会批判の精神をもったその作品から、きつと他人に対してのいい加減さを許さない人物だろうと思われていたり、叙情詩としては厳格に過ぎるという評価もあるようだが、この書体で読む茨木のり子の詩には、また違ったまなざしを感じておもしろい。

ああそうか、彼女は、こんなにかわいらしい声をしたひとだったのだ、と。

どうしてだろう。声なんて、きこえるはずはないのに。

どれも同じ言葉のはずなのに。

満員電車のなかで

したたか足を踏ふまれたら

大いに叫きけぼう あんぼんたん！

いったいぜんたい人の足を何だと思ってるの

茨木のり子

「見えない配達夫」

童話屋 (2003年)

Page 127

はじめてこの書体をみたのが何の本だったのかは忘れてしまったが、最初に「いいなあ」と感じたのは、母の読みかけのエッセイか何かだったと思う。考えてみれば、私も姉も自分専用の本棚を与えられたことはなく、十八歳のときに実家を出るまでずっと居間の本棚を両親と共有していたのだが、何となく、子供の本は子供の背が届くところまで、と領分が決まっていた。つまり本棚のいちばんつかいやすい場所を子供たちが占有していたともいえる。だから小さなころは、ほんとうに文字どおりそのままの意味で、「手の届かない本」というのがたくさんあった。安部公房とか、遠藤周作とか、立原正秋とか。それらは父や母が若いころに買ったもので、たいてい古く、煙草の脂で黄ばんでおり、正直いってあまり心惹かれるものではなかったが、少しづつ背がのびて、「手に届く」本が増えるのは単純にうれしかった。

ふしぎだったのは、私より三つ年上の姉が、ある日ついに棚のいちばん上からとりだしてきた古本をみて、父も母も、その本がどこにあったか全然覚えていない様子だったことだ（今ならその気持ちがよくわかる）。

そうして出会ったなかで、私にもわかる、と直感的に思う本は、〈石井中明朝ニュースタイル〉のものが多かった。難しいことや、こわいことや、性的なことはまったくかかれていないのに、児童文学とは明らかに違う世界がそこにはあって、大人にまじって夜更かしをしているような気分を味わえた。

おやじが考案したおじやうどんなのだ。

文字から聞こえる声のせいかもしれない。

勿論、錯覚だとわかっているけれど、それでもやっぱり「声」としかいいあらわせない、深夜のラジオみたいな親しい空気が文字から伝わってくる。

だから特定の文体というよりは、軽妙な会話や、書き手の口調が際立つ文章こそ、この書体で読みたくなる。「トホホ」とか「エート」とか「おなつかしゅうございます」とか。ひとつひとつの言葉の呼吸、そして声色が「キチンと」目に入ってくるこのすばさ。

だいたい、この書体にはユーモアが似合う。

ちよつと気がきいていて、消化にいい、温かいものを食べたみたいに、なんだかほつとして、すつと腑に落ちる。

一見、頭の堅そうなふりをして、実は情が深いのだ。

泣いたり怒ったり、ときにはやるせないため息をこぼしたりしながら、優柔不断に、けれどおおまじめに生きている人間のさまを、この文字は愛情たっぷりにうつしだす。

私はその本をひらいて、「ああ、ちよつとこんなものが読みたかった」と思う。そこに何がかかっているかを知る前から。

一夜の空腹を満たすのに、それ以上の贅沢があるだろうか。

奇妙な荒行をくり返

す私を見て、「そのう

ち山伏か仙人になつち

まうんじゃねエのか」

と言って笑う。臭足の

ヒロシの足さえも、

惨めなほどうらやまし

く感じたものである。

そんな私の姿を見て、

かわいそうに思った母

が、「実は私も昔、水

虫になった事があつて

ね……」と告白し始め